

[第 3 回]

「街」

に活力が戻る。



「自分たちができる何か」を
信じて街に元気を。

四年前、被災した東北の状況を
目の当たりにした人の多くはこう
考えたはずだ。「何か自分ででき
ることはないのか」と。

その「何か」を見つけ、動き出
した人たちがいた。その取組みを
通じて人と人が出会い、共鳴し、
活動が膨らんでいった。復興事業
の現場も、関わる全ての人が持つ
る力を尽くして前進を続けている。
今、その成果が東北に元気を広
げている。「自分でできる何か」と
いう種子が、傷ついた海辺の町で
芽を出していた。



[特集] 元気です！東北より。

元気です！東北より。

東北一〇拠点で
夜空を染めた花火

東日本大震災の五カ月後、花火大会が東北の一〇地区で同時に催された。震災の傷跡も生々しい被災地を照らす花火は、多くの人に笑顔と希望をもたらした。

仕掛けたのは、東京の大手広告代理店で営業職にあった高田佳岳さん。その経緯をこう話してくれた。「震災の惨状をメディアを通して目の当たりにし、何かできることはないかと日々考えていました。そこへ東京湾大華火祭が中止になったことを耳にして、それなら余った花火を東北に持って行って、花火大会ができるんじゃないかと。きっかけはそんな冗談みたいな発想でした」。実は「花火」そのものに深い思い入れがあったわけではなく、明かす。「仕事上、催事の企画立案から、実施に至るまで数多くの経験を踏んできました。そのノウハウを東北の元気発揚に活かさないかと思っただけです」。

当時の仕事は、大手不動産会社の物件と周辺の街とを結ぶ交流イ

ベントやPRの企画立案。地域を元気にする催事はお手のものだ。四月には現地に入って有志を募り、その翌月には実行委員会が結成された。広告業界で形成した人脈、イベント会社から、プランナーやデザイナーをはじめとするクリエイター集団までも巻き込んで、「LIGHT UP NIPPON」は猛スピードで走り出した。

「イベント開催は自粛ムードの最中で、多くの周辺にも『何かできないか』の『何か』を探している人が数多くいた。潜在的なマンパワーは潤沢でした。それ以上に、企画に賛同してくれた東北の方々の熱意が大きな推進力になったことは言うまでもありません」。

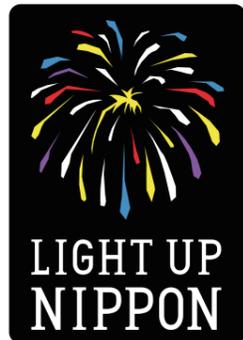
**自らのスキルを生かし
東北に「元気」を**

高田さんとはかく海が好きなのだ。と笑う。海のことを知りたくて北極圏に渡航したこともある。東京水産大で海洋学を修めた後、東京大学大学院に進む。海関係の仕事を目指したが、何をするにも企画力、プロモーション力、そし

てサラリーマンの経験は必須と思いき直し広告代理店を選んだ。

大学院の二年間は岩手県大槌町にある同大の海洋研究所で過ごした。その第二の故郷が津波に呑まれた。気が気ではなかった。「企画のプロとしてエンターテインメントの分野でできることがあると思えました。それが花火だったんです」。高田さんは企画書を起こし社内で作案したが、なかなか賛同を得ることができなかった。そこで個人的な人脈を辿り、プロジェクトを立ち上げたところ、志をひきつづける仲間が集まった。東京で募金活動、現地では調整作業。奔走する日々が始まった。

多くの仲間やクライアントから七、三〇〇万円を超える協賛金、寄付金が寄せられた。そして五カ月後の八月、震災と同じ十一日に「東北を、日本を、花火で、元気に。」をキーメッセージとして花火大会が実現した。総来場者数は四万名を優に超えた。「追悼」と「復興」の祈りを込めた二万三、〇〇〇発もの、大輪の花火が福島、宮城、岩手の夜空を美しく染め上げた。



LIGHT UP NIPPONとは？

「東北を、日本を、花火で、元気に」をスローガンに東北太平洋沿岸部複数力所です「追悼」と「復興」の祈りを込めて、一斉に花火を打ち上げるプロジェクト。2011年8月11日に花火を打ち上げてから、今年で5回目となる。被災されたひとりひとりが、ふたたび未来へと歩みはじめるきっかけをつくりたい。被災地の悲しみや苦しみ、自分たちの想像をはるかに超えるものとしても、これまでと同じように、生きること、生き続けることの先には、希望や喜びがある。そんな当たり前のことを、改めて感じる機会をつくりたい。その想いが広がり、多くの賛同者へとつながった。そして2015年8月11日も東北沿岸で花火を打ち上げる。

「街」に活力が戻る。

コミュニティを活かす。



地元
に委ね、
絶対に
風化さ
せない。

LIGHT UP NIPPON



LIGHT UP NIPPON
実行委員会
代表(発起人)
高田 佳岳

現地の人が主役
地域同士の連携も

イベントの様子は、ドキュメンタリー映画として公開され、大きな感動を呼んだ。その一部はLIGHT UP NIPPONのホームページで見ることができる。薄暮の空に咲く大輪の花を見上げ歓声をあげる子供たち。涙を浮かべ、それでも笑顔を夜空に向けて若い女性。ひたすら深い眼差しを湛えた老人の横顔。花火大会に込められた想いを伝えるのに、拙い文章はあまりにも無力だ。「あらゆる分野のプロが結集して花火大会を成功に導くことができました。ほく自身これほど綺麗な花火を見たことはなかった」と高田さんは振り返る。

LIGHT UP NIPPONは開催地に声をかけ、協賛、寄付金を募り、PR活動に専念する。大会のサポーターという立ち位置だ。催事をパッケージ化して各地で展開する手法は取らなかった。主体となるのはあくまで開催地となる「地元」だ。それぞれの開催地には、受け継がれてきた夏祭りのスタイルや伝統があり、それに沿った開催が合理的だと高田さんは話す。「イベントの実行を地元で預け、任せることで継続性が担保できると考えました。企画を練り上げていく過程で、開催地同士の関係も深まってきました」。第一回の開催直後から「来年」の話が出た。花火大会は東北の元気をつなぎ、今年五回目を迎える。

自主開催が復興の証し

花火大会開催の重要なファクターのひとつが「資金」だ。「〇〇〇発規模の花火大会の費用は一会場当たり数百万〜一、〇〇〇万円の予算が必要になる。高田さんが企画を立ち上げた時、不動産、ITからメーカーまで業種の垣根を超えた一〇〇近い企業、団体が協賛に名乗りをあげた。しかし今、高田さんには、支援してくれる企業に、何かを還元したいという思いがある。一昨年からは都内で花火大会と連動して、協賛企業をPRするイベントも開催するようになった。その利益を花火大会の資金に還元する。開催に至る経緯を目に見える形で展開、露出するこ

とが震災を風化させない施策になるという思惑がある。高田さんはこれが一〇〇年続くイベントであってほしいと願っている。しかし、地元の祭りが東京の資本で動くというのは、あるべき姿ではないとも話す。「プロジェクトを『卒業』し、自分たちで協賛を募り開催する地区もでてきました。それが復興ということなんです。LIGHT UP NIPPONが未来永劫続くとは考えていません。それでも「今年もありがとう、ありがとなー」「おまえ、まさか今回で終わりとか言わないよな」と声をかけられる。「その言葉が『やってよかった』と強く思わせてくれるんです」。元気をもらったのは高田さんご自身なのかもしれない。



開催地ごとに結成された実行員会によって、その土地ならではの色を持つ「夏祭り」が計画された。2年目、3年目と実行委員会ごとの交流も深まり、他の町はどんなことをやっているのかと、情報交換が盛んに行われるようになった。さらには、「あの町に負けない大会にしよう!」と切磋琢磨する姿もあったという。

東北の
笑顔を照らす
花火を咲かす。



元気です！東北より。

「きつかけは、コットン（綿）は塩に強い、海水を被った農地でも栽培できるんじゃないか、というある人の提案でした」と語るのは東京を拠点として幅広くアパレルを手がける「kurkku」の広報担当、畑雅人さん。被災地の農家と共同で農業の再生を目的に現地で作りに挑む「東北コットンプロジェクト」の事務局を務めている。

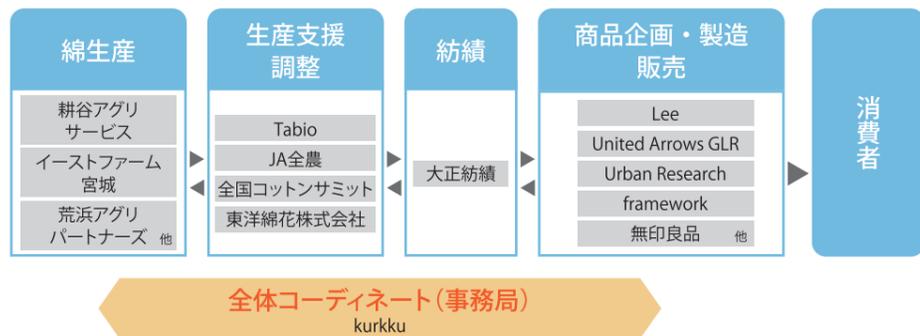
畑さんは「震災直後、社内では『僕たちにできることって何かな？』と議論が頻繁に交わされていました」と言葉が続く。kurkkuは以前からインドでオーガニックコットンの生産に取り組んでいた。この「綿」を通じて何かできないかとアパレル数社で勉強会を始めたが、なかなか具体策が見つからない。「そんな時あるイベントで大正紡績(株)営業部長の近藤健一氏が『塩害に強い綿花で東北を救おう』と呼びかけておられました。その提案に『是非一緒にやらせてください』とお願ひし、ご快諾いただ

「街」に活力が戻る。

産業を守る。

有限会社
耕谷アグリサービス
佐々木 和也

東北コットンプロジェクトの体制



kurkku alternative
広報
畑 雅人

東北コットンプロジェクト
農地の再生が
地域をつないだ

いたのが始まりです。近藤氏は、世界各国で紡績工場を立ち上げてきたコットン界の重鎮。同氏は靴下メーカー「タビオ」の越智正直会長とともに農地の視察など、具体的な動きをすでに始めていた。

近藤氏と越智会長、そして様々な企業や団体がタッグを組み、プロジェクトの基盤が形成された。「同じような想いを抱いていた人たちが出会い、このプロジェクトにつながりました」と畑さんは振り返る。まさに「綿」が紡いだ縁だ。

賛同する企業は瞬く間に七〇社を数えるまでになった。積極的に参加を募ることはしていない。「業種も問いません。緩やかな運営ですが、ひとつだけ、なんらかの役割を担っていただくことを約束事にしていきます」と畑さんは話す。

プロジェクトはあくまで農家が主体だ。参加企業は自社の業態を生かして、できることをやる。栽培の技術支援、繊維としての製品化はもちろん、イベントの運営、広報活動。多彩な活動を多くの企業が自発的に展開する前提は現在も変わらない。

人の輪が緩やかな組織を形成しプロジェクトが発足。震災の二ヵ月後には名取市と仙台市荒浜地区の農家との協議が本格化した。

畑さんに現地の農家を紹介していただいた話を聞きに行くことにした。「東北ではもっと熱い声がかかると思いますよ」。畑さんは笑いながら送り出してくれた。

**黒く染まった畑に
コットンの種を蒔いた**

宮城県名取市の(有)耕谷アグリサービスを訪ねた。主に米や麦、大豆を生産する農業法人だ。東北コットンプロジェクトの発足当時から綿花の栽培を続けている。

震災時、仙台からほど近いこの海辺の集落は津波により壊滅的な被害を被り、耕作地を失った農家は失意の底にあった。同社の佐々木和也主任はプロジェクトとの出合いをこう語る。「まだ呆然としていた頃ですが、本当にある日突然！という感じでタビオの越智会長から『ここで綿を作ってみませんか』と声をかけていただきました。当時の社長が『土を動かすこ



閉上地区をはじめ、津波によって甚大な被害を受けた名取市。田を含め、市の面積の37km²を農用地が占める。その約80%が浸水の被害にあった。

綿花栽培の北限で
挑戦を続ける

とから始めてみよう」と、コットンの栽培を決意したんです。会社の農地は周囲よりほんの少し地盤が高かったが、津波は容赦なく押し寄せ、田畑は冠水した。一〇名ほどの社員は全員無事、人的被害は免れた。しかし、周囲にはがれきが残り、畑はうっすらとヘドロを敷き詰めたような状態だった。「土というより塩を被ったアスファルトのようになってしまった」。経験も知識もない中、プロジェクトが動き出した瞬間だった。

コットンがどんな植物なのかわからない。栽培に関する情報もごく限られたものしか集めることができなかった。「まさに試行錯誤の状態でした。それでも芽が出たんです。その年の秋には収穫できました。本当に嬉しかった」と佐々木さんは回想する。量はほんの少なかったが、その時の感動を忘れることはない。「実ったコットンボールは手のひらで包み込むと暖かいんですよ。腹がふくれる収穫物ではありませんが、人の心を温めてくれる作物なんだなあと実感しました。佐々木さんがかたわらの綿を差し出す。手で受け取るとふわっとした感触とともに確かにほっこりと温もりが伝わってきた。プロジェクトが中心となって開催した収穫祭には近隣の住民も集まってくれた。「子供たちが『ワタってこういうふうに見えるんだ』と目を輝かせていました。私たち自身、枝に付いたコットンを見るのは初めてだったんですけどね」と

震災と復興の記憶をつなぐ証として

二月、名取は四回目の収穫の最中であつた。一帯の田畑は雪で薄く覆われているがコットンの摘み取りはまだ続いていた。「本来は九月ごろから収穫が始まり、機械化の進んだ大規模農場ならば一挙に収穫するところですが、ここでは人手を割くことができませぬ。育成を観察しながら冬場でも一つひとつ手で摘み取っています」と佐々木さんは説明する。寒空の下、ふわふわとコットンが揺れていた。

佐々木さんは笑う。

初回の収穫量は隣の荒浜地区と合わせても七〇割ほど。想定を大幅に下回る量だった。寒冷地では限界があるのか。塩に強いとはいえ、大雨や霜など湿気の影響も大きかったようだ。「加えて害虫から大人気の植物なんです。せつかく伸びた枝や実を食われてしまふ」。それでもめげない。二年目からも品種を増やしたり、ハウスで育ててみたり、様々な方法でコットンと向き合う日々が続いた。



左/5月、プロジェクトチームやボランティアが参加して種まきが行われた。上/ビニールハウス内でも苗を育て、収穫量をあげる工夫を凝らす。



時期は終わったと佐々木さんは考えている。「まだまだやり方を模索している段階ですが、綿花栽培は続けていく。コットンプロジェクトは、ここで震災があつた、復興の道筋を歩んできたことを自分の心に刻み続ける精神的なモニユメントでもあるんです」。

崩壊した農地を見渡し、失意のなか、「離農」という言葉を脳裏によぎらせた生産者も少なくなかったという。しかし、連綿と受け継いできた土から身を引く決断は容易ではない。「当社にとってもコットンプロジェクトは、ここで再起しようとするモチベーションになったことは間違いありません。多くの人と知り合い、他産業の価値観や方法論に触れることもできました。これからの農業に活かせる貴重な知見です」。

佐々木さんは、震災の記憶を胸に留めながら、しっかりと前を、東北農業の将来を見つめている。取材後、佐々木さんが振舞ってくれた色鮮やかなイチゴは驚くほど甘く美味しかった。そう伝えるとその日一番の笑顔を見せてくれた。



昨年11月に行われた収穫祭の様子。この日の参加者、30人ほどでは足りないほどの豊作だった。



左/獲った綿はビニールハウス内で一度乾燥させ、出荷を待つ。開いていない蕾も、乾燥させることでやがて開く。中/ごみの除去から数々の工程を経て、うどん程度の太さに。さらに30倍の長さには伸ばすと、見慣れた糸の姿になる。右/プロジェクトの綿が入っている製品にはしっかりとタグがつく。Tシャツやブラウス、タオルなどへ製品化される。

元気です！東北より。

一刻も早く故郷へ

陸前高田市震災復興事業



UR都市機構
岩手震災復興支援本部
陸前高田復興支援事務所長
桑島 義也

「街」に活力が戻る。

建設業が支える。



すべてが流された
ゼロからのスタート

空を見上げると宙空を長大なベルトコンベアが縦横に走っていた。川を渡り、大地を越える全長三隣。西側の山を削り、採取した土砂をこのベルトコンベアで東側に広がる旧市街に運び高上げる。陸前高田市の土地造成の現場だ。

波高一五メートルを超える震災の津波は、市街地を一瞬にして呑み込み、死者・行方不明者は一、七〇〇名を超えた。市は災害に強い安全な街づくりを目指し、今泉地区と高田地区における市街地の嵩上げ、高台の宅地造成に取り組んでいる。事業の対象面積は両地区で三〇〇畝以上、約一、二〇〇万立方メートルの土砂を動かす大規模な土地造成だ。事業を受託するUR都市機構の桑島義也所長はその意義をこう語る。「震災から四年を経た今も四、一〇〇名もの市民が仮設住宅での生活を余儀なくされています。皆さん街に帰る日を心待ちにしている。この現場に課せられた使命は早期施工に尽きます。ベルトコンベア

はある種その象徴なんです」。

市は震災の翌年にURとまちづくりの推進に向けた覚書を交わし復興を加速させた。都市再生、賃貸住宅の経営を行うURは災害復興も業務の柱である。阪神・淡路大震災、新潟県中越地震でも土地区画整理事業、住宅建設で多大な実績を残してきた。現在、東北全域に四〇〇名もの職員を派遣し、震災復興に力を尽くしている。



新しい市街地のイメージ。
活力にあふれ、命と絆を守るまちの創造を目指す。



「希望のかけ橋」と名付けられた気仙川横断吊り橋。今泉地区から排出される土砂の運搬を支える。



市内で最初に完成した災害公営住宅。昨年2014年10月1日より入居がはじまった。



復興の象徴として残されている「奇跡の一本松」。多くの人々がその姿を見に訪れる。

事業には工期を大幅に短縮するため近年関心が高まっている方式が導入された。共同事業者のCMR(コンストラクションマネージャー)が技術の中立性を保ちつつ発注者の側に立って一体的な管理業務を行うCM方式という発注システムもその一つだ。さらに、プラストトラック方式は、全体設計の完了を待たず、終わったところから順次着手することを可能とした。全ては一刻も早い復興を目指す施策。事業主体の陸前高田市、業務全般の総合調整役であるUR、調査、設計と施工を担う建設会社を核としたJV、三者が一体となり新たな街づくりが展開されている。

造成と同時に嵩上げを施工
街を縦貫する気仙川の西側、今泉地区の小高い山がベルトコンベアの起点だ。標高一三〇mを五〇mまで切下げ、その土砂を盛土材として川の対岸の高田地区へ送る。まさに山を一つ移動させる工事だ。発破で山を削り、発生した岩を八基の破砕機に投入、最大三〇〇m³まで粒径を整え、ベルトコンベアに乗せる。
ベルトコンベアの搬送能力は一日一〇時間稼働して約二万立方メートル。ポンプでおよそ四、〇〇〇台分に相当する土量だ。「ベルトコン

ベアで約五〇〇万立方メートルの土砂を運ぶ予定です。そのスピードもさることながら、工事車両の通行に関わる事故、環境悪化を防止することを考慮すると、ベルトコンベアは早期完工、安全確保を両立する要の施設です。それにしても、これだけの巨大装置は見たことがありません」と桑島所長は話す。
高田地区には五カ所の吐出部があり、それぞれ円弧状に旋回が可能で、広範囲に土砂を配置できる。これを重ダンプでヤード内に均して仮置きした後、盛土材として嵩上げ、整地に活用する。
今泉地区では掘削する地盤が硬岩に達し、設備のメンテナンスに

時間を割かれるようになった。施工を託されたJVの峯澤孝永プロジェクトマネージャー(清水建設(株))にお話を伺った。「ひと月に四〇万立方メートルを目指し、約四〇〇名の作業員が鋭意施工にあたっていますが、とにかく岩が硬くなってきました。ブルドーザーのリッパ(爪)も二日で交換しなければならぬほどです」。破砕機、ベルトコンベアの点検作業も朝までかかるという。夕方六時に停止した後、細部にわたり点検、補修を行う。これが毎日の工程だ。「現場はほぼ二十四時間体制です。今朝も明け方五時に『作業終了』と報告がありました。大変な現場ですが注目度も



右2点/今泉地区に設置されている破砕設備。発破作業により発生した岩石を300mm以下に砕き、ベルトコンベアに投入する。稼働状況は設置された50台以上のカメラによって中央操作室でリアルタイムで監視されている。
左2点/幅1.8m、全長約3kmのベルトコンベアは、1時間に6,000tもの土砂を運搬する。



元気です！東北より。



清水・西松・青木あすなろ・
オリエンタルコンサルタンツ・
国際航業JV
陸前高田市震災復興事業
プロジェクトマネージャー
統括管理技術者
峯澤 孝永

業界の威信をかけ、 取組んでいます。

高い。一日でも早く市民が暮らせる街を造ろうと、作業員一同頑張っています」と峯澤マネージャーは話してくれた。

**思いはひとつ
「一日も早く」**

このエリアでは毎夏『うごく七夕』『けんか七夕』祭りが開催される。八月七日は地域にとって特別な日だ。しかし、華麗に装飾された山車を曳きながら市民が練り歩いたかつての街並みは現在、立入禁止区域だ。「開催を切望する市民の声に応え、職員が奔走して作業を調整しました。暗闇に浮かび上がる山車は本当に美しかった。忘れません」と桑島所長は回想する。以前同様の場所で行われる夏の祭りはこれが最後となる。「現場の思いはひとつです。練り返しますが一日も早い街への帰還。市や私も受託者、そして施工者のJVはいまや共同体です。全員で工夫を凝らし、さらなる加速化を図っていききたい。この意気込みに峯澤マネージャーはこう応える。「最終形を正確に想定して、絶対

に『手戻り』を出さない、それがスピードアップの中軸になります。やり直しは許されません。土木には当地のベルトコンベアのようなウルトラCなどそうそうあるものではない。地道に真摯に取り組んでいきます」。

事業は平成三〇年度の完了を目指している。長年、都市開発に携わってきた桑島所長は、これが最後の現場になるかもしれないと語る。「これまでに培ってきた自らの経験を、この地で最大限にまで生かしたい」。陸前高田の現場は覚悟を決めている。



8月7日に行われる「うごく七夕」。この日だけは、工事による通行止めを部分的に解除し、山車が練り歩いた。